

ルーブリック評価表を用いたレポートの評価について—教員の観点からの再考—

The Evaluation of Report Using Rubric Evaluation Chart : Reconsideration from the Teacher's Viewpoint

吉田好美（早稲田大学）・藤田百子（早稲田大学）

鄭在喜（早稲田大学）・三井一巳（早稲田大学大学院生）

1. 調査の動機と目的

所属校の中上級レベルのクラスではレポート活動を実施しており、評価にはルーブリック評価表を用いている。鄭他（2017）では、中上級レベルの受講生に対してレポート活動に関するルーブリック評価調査を行い、受講生の気づきについて分析したところ、「つながりの表現」や「文型、表現」が意識されていないことが明らかになり、ルーブリック評価が学生の気づきに有効であることが示唆された。しかし、学生側の気づきを言及するに留まり、指導において有効かという、教員が評価する際の問題点については述べられていない。そこで本調査では、鄭他（2017）でのルーブリック評価調査を実施した教員を対象に事後調査を行い、中上級レベルのレポートの評価を再考する。

2. 先行研究

当レベルで扱っているルーブリック評価表は「準備（アウトライン）」「構成」「内容」「表現の適切さ」「形式」の5項目に分類されている。更に各項目には評価のポイントの詳細が示されており、その評価項目にしたがって「A+」から「C」の4段階形式となっている。なお、「教員用」と「受講生用」を別途に作成した。教員用には評価に対する説明や点数の算出方法、評価の仕方等をより詳細に記述した「補足説明付」も作成した。以下表1はルーブリック評価表（教員用補足説明付）の内容項目の一部を抜粋したものである（三井他 2019）。

表1 ルーブリック評価表（教員用補足説明付）

| | A+（とても良い） | A（良い） | B（もう少し） | C（頑張りましょう） |
|----|--|--|--|--|
| 内容 | <input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と、背景と明確に関連付けられた問題提起が書かれている。（1.5点） <input type="checkbox"/> 本論：客観的なデータに基づいて、自分の意見の論拠が導きだされており、説得力がある。（1点） | <input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と問題提起がどちらも書かれている。 <u>レポートの目的だけでは問題提起と考えない。</u> （1.5点） <input type="checkbox"/> 本論：客観的なデータに基づいて、自分の意見が述べられている。 <u>客観的なデータとは、レポートのテーマに沿った信頼できる情報源である場合。</u> （1点） | <input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と問題提起のどちらかしか書かれていない。または、はっきり書かれていない。（1点） <input type="checkbox"/> 本論：データに基づいて自分の意見の論拠を示しているが、客観的で適切なデータではない。 <u>例）ウィキペディアや個人ブログなど。なお、データは提示されているが、意見を直接指示する論拠ではない。</u> （0.5点） | <input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と問題提起のどちらも書かれていない。 <u>序論がない文章の場合。</u> <input type="checkbox"/> 本論：データのみ、または自分の意見のみしか述べられていない。 <u>信頼できない情報源しか書かれていない場合。または、自分の個人的な意見しか書かれていなくて論拠が示されていない場合。</u> |

（三井他 2019 より抜粋）

鄭他（2017）では、受講生78名と担当教員14名を対象に、ルーブリック評価表を用いた両者の評価のずれに関する調査を実施した。その結果、教員と受講生間の評価の差が最も大きかったのは「表現の適切さ」であり、受講生の自己評価が高いのに対し、教員の評価は低いことが分かった。なお、ルーブリック評価表を用いたレポート活動において、成果物に対する達成度が明示化され、それにより受講生自らが不足している部分を教師との評価のずれを認識することで、ルーブリック評価表がレベル向上の意識化に繋がるきっかけになると考える。しかし、レポート修正に関しては、ルーブリック評価表にレポートの達成度が具体的に提示されていても受講生が自律的に修正できず、従来同様教員の添削に依存する傾向は依然として見られた（三井他 2019）。

3. 調査内容と結果

この結果を踏まえ、本調査では教員がどのような観点からルーブリック評価表を使って評価を行ったのか検証すべく、調査に同意を得られた6名の担当教員に「ルーブリックを使用した評価についてどう思ったか」、「ルーブリック評価の5つの項目について」、「ルーブリック評価表全体について」の3点について回答してもらった。

① 「ルーブリックを使用した評価についてどう思ったか」

「レポートの評価方法については常に困難を感じていたが、評価観点と評価尺度が明確に示されており、新鮮だと思った。」「レポートの書き方（構成）に不慣れな学生にとっては評価の観点を事前に知らせることで論理的な内容のレポートに仕上がりに、効果的だった」という回答があった。この回答からダネル（2014）でも述べられている「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」というルーブリック評価の概念が、実際にルーブリック評価表を使うことで教員自身も確認できたといえる。しかし、「評価には十分な吟味が必要であり、1件のレポートの評価に時間がかかる」といった時間的な問題点を指摘した回答も見られた。

② 「ルーブリック評価表の5つの項目について」

「A+」と「A」の評価の違いが不明瞭であるといった評価の分かりにくさや、「A-」、「B+」、「B-」という尺度はないのか等、評価尺度とその基準に関する記述が5つ全ての項目で見られた。これは、上述した評価に時間がかかりすぎるといふ回答も含め、調査対象者の6名中5名がルーブリック評価表を使用した評価が初めてだったことが一因として考えられる。

③ 「ルーブリック評価表全体について」

「内容の「本論」、表現の適切さには様々なケースがあって対応しきれないと思います。」「自由な論理展開を好む学生のレポートの評価は低くなってしまった。」のように、個々のケースへの対応の困難さを述べる回答や、「学生のレポートを相対評価してみると（漠然と）、差があるものがルーブリックでは差として評価されない。」という回答が見られ、客観的な評価指標を示すことによってレポートのオリジナリティーや面白さといった、レポートの内容の深さに関する評価基準が「評価されないもの」として見えてきて、ルーブリック評価の限界が浮き彫りとなった。

4. まとめと今後の課題

本調査の結果から、ルーブリック評価表にまだ慣れていない教員が多数いること、そのため、その評価に関する認識が薄いことが示唆された。一方で、本調査で使用したルーブリック評価表は内容の深さ等レポートにおけるすべての要素を評価対象としているものではなかったが、教員間でルーブリック評価表における評価の観点に関する共通の認識が薄かったことも示唆される。ルーブリック評価は客観的な評価尺度として先行研究においても立証されている評価方法である。したがって、教員側がルーブリック評価表を用いてレポートを評価するには、ルーブリック評価表で評価できる範囲を知ることが必要であり、またその評価の限界からレポート指導の方向性もより明確になるのではないかと考える。

参考文献

- ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ（2014）佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典（訳）『大学教員のためのルーブリック評価』玉川大学出版部
- 鄭在喜・吉田好美・藤田百子・三井一巳（2017）「中級から中上級への向上に必要な要素に関する一考察—ルーブリック評価表を用いて—」『日本語教育方法研究会』Vol.24(No.1), 26-27
- 三井一巳・鄭在喜・藤田百子・吉田好美（2019）「レポート作成におけるルーブリック評価の考察—教員と受講生の評価観点のずれとレポート産出の変化からの考察—」『早稲田日本語教育実践研究』第7号,15-22